

学術推進委員会企画 交流集会  
「被ばく医療体制と看護職の役割—課題と展望—」を  
振り返って  
Review the meeting, 'The problem and future perspective of  
radiation emergency medical system and role of a nurse'  
which was organized by academic promotion committee

西沢 義子

Yoshiko NISHIZAWA

弘前大学大学院保健学研究科

Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

日本放射線看護学会学術推進委員会では交流集会第2回目のテーマとして、被ばく医療体制に焦点を当てました。

立崎英夫氏（量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所被ばく医療センター）からは、「新しい原子力災害医療体制」についてご発表いただきました。原子力災害拠点病院は、原子炉施設等立地道府県等に数箇所ずつ指定されています。また、原子力災害医療協力機関の役割は、傷病はないが被ばくしている者への検査・除染、救護所等における健康管理を行うとともに原子力災害拠点病院への協力をを行います。国が指定する高度被ばく医療支援センター（5施設）は診療機能はもちろん、原子力災害拠点病院等との医療連携、教育研修・訓練の実施、関係機関への支援体制等の役割があります。原子力災害医療・総合支援センター（4施設）も国が指定しますが、原子力災害医療派遣チームの派遣調整の役割があることが述べられました。

井瀧千恵子氏（弘前大学大学院保健学研究科）からは「青森県における原子力災害ネットワーク構築の現状と課題」についてご発表いただきました。原発立地県である青森県でもネットワーク構築は十分とは言えない状況であることなどが述べられ、「訓練でできないことは実際にはできない」ことを指摘し、繰り返しの訓練の必要性と人材育成の重要性を強調されました。

折田真紀子氏（長崎大学原爆後障害医療研究所）からは福島第一原子力発電所事故後から川内村や富岡町において住民の傍に寄り添った活動を展開してきた豊富な経験に基づき、「看護職が行うリスクコミュニケーション」について事例を交えてご発表いただきました。特に帰還が始まった現在では住民の疑問に真摯に向き合い、情報共有を続けていくことが重要であることを強調していました。

参加者との意見交換では、院内での定期的な研修会や看護基礎教育では放射線の基礎知識と放射線防護の3原則を中心にe-learningを取り入れた教育について紹介され、確実な知識獲得のためには演習なども必要であることが述べられました。

doi: 10.24680/msj.6.1\_82

最後に看護職への期待として、立崎氏からは、放射線を恐れず、患者への疑問に対して説明するためには正しい知識が必要であること、井瀧氏からは被ばく医療に取り組んでいる看護師は少ないこと、受け入れ機関の看護職は最低限の正しい知識を持ち、放射線と向き合う姿勢が求められることなどが、そして、折田氏からは、緊急時に即座に動けるように、普段から被ばく医療に参画し連携していくことが求められることが強調されました。

今回の交流集会を通して、被ばく医療体制に関する最新情報の共有が求められるとともに、それぞれの実践を通して将来的には「被ばく医療における看護」の明確化が図られることを期待したい。

(学術推進委員会：西沢義子、野戸結花、青木和恵、太田勝正、大森純子、作田裕美)